

期 日 二〇一六年十月八日（土）・九日（日）  
会 場 奈良女子大学

日本中国学会  
第六十八回大会要項

日本中国学会

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申しあげます。

さて、日本中国学会第六十八回大会を、来る十月八日（土）・九日（日）の両日にわたり、奈良女子大学にて開催いたします。万障お繰り合わせのうえ、ご参加くださいますよう案内申しあげます。

ご参会の方は、同封の振込用紙を使用し、必要な項目に○印をつけ、合計振込額を記入のうえ、二〇一六年九月十六日（金）までにお振り込みください。消印は九月十六日を有効とし、振替受領証をもって領収書に代えさせていただきます。振替受領証は、諸会費支払い済みの証明書として受付にてご提示いただく必要がございますので、大会参加の際にはお忘れなくご持参いただきますよう、お願いいたします。

敬具

二〇一六年八月十日

日本中国学会理事長

土田 健次郎

第六十八回大会準備会代表

野村 鮎子

会員各位

# 日本中国学会第六十八回大会

2016年10月7日～9日

日	時	行 事	会 場
7日 (金)	13:00	理 事 会	大学院 F 棟 5 階大会議室
	15:00	次期評議員会	大学院 F 棟 5 階大会議室
	15:45	評議員会	大学院 F 棟 5 階大会議室
8日 (土)	9:00	受 付 開 始	記念館 1 階
	9:30	開 会 式	記念館 2 階
	10:00 ? 12:00	研究発表	(各会場)
		I. 哲学・思想部会	第一会場 文学系 N 棟 3 階 302 教室
		II. 文学・語学部会 (1)	第二会場 文学系 S 棟 2 階 235 教室
		同 (2)	第三会場 文学系 N 棟 2 階 202 教室
	12:00	III. 日本漢文部会	第四会場 文学系 N 棟 2 階 201 教室
	12:10	記 念 撮 影	記念館前 (雨天時:国際交流プラザ)
	12:20	各種委員会	文学系 S 棟 1 階 2 階各教室※
	14:00	特別講演会「寧楽と中国」	講堂
17:00	総 会	講堂	
18:30	懇 親 会	奈良国立博物館地下 1 階「葉風秦夢」	
9日 (日)	9:00	受 付 開 始	記念館 1 階
	9:30 ? 12:00	研究発表	(各会場)
		I. 哲学・思想部会	第一会場 文学系 N 棟 3 階 302 教室
		II. 文学・語学部会 (1)	第二会場 文学系 S 棟 2 階 235 教室
		同 (2)	第三会場 文学系 N 棟 2 階 202 教室
	12:00	III. 日本漢文部会	第四会場 文学系 N 棟 2 階 201 教室
	12:00	理 事 会	文学系 S 棟 3 階 311 教室
13:00 ? 15:00	研究発表	(各会場)	
	I. 哲学・思想部会	第一会場 文学系 N 棟 3 階 302 教室	
	II. 文学・語学部会 (1)	第二会場 文学系 S 棟 2 階 235 教室	
15:00	同 (2)	第三会場 文学系 N 棟 2 階 202 教室	
15:10	III. 日本漢文部会	第四会場 文学系 N 棟 2 階 201 教室	
15:10	閉 会 式	記念館 2 階	

※ 各種委員会教室

大会委員会 S 棟 123

論文審査委員会 S 棟 128

出版委員会 S 棟 124

選挙管理委員会 S 棟 125

研究推進・国際交流委員会 S 棟 126

広報委員会 S 棟 227

将来計画特別委員会 S 棟 228

■学会事務局／大会準備会控室 記念館1階生涯学習研究室

■休憩室 文学系S棟1階ラウンジ

■手荷物預かり 文学系S棟1階122教室

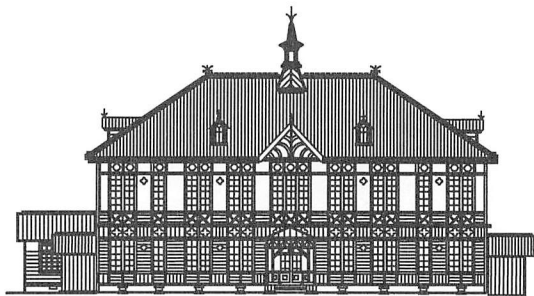
■書店出版社展示 文学系N棟1階101教室

■諸会費

- ・大会参加費 2,000円
- ・懇親会費 6,000円（院生4,000円）
- ・昼食弁当代 1,000円／一食
- ・写真代 1,000円

■お願い

- ・懇親会費には、雅楽鑑賞を含みます。
- ・大学構内は禁煙です。喫煙は所定の場所（文学系N棟東側の倉庫前）でお願いします。
- ・大学の食堂は8日（土）のみ営業しています。
- ・近鉄奈良駅周辺には飲食店がありますが、連休のため観光客で混雑します。お弁当をお申込みいただくのが確実です。
- ・8日の各種委員会、9日の理事会の出席者には昼食弁当が出ますので、お申込みいただくには及びません。
- ・構内の駐車場は利用できません。公共交通機関をご利用ください。
- ・構内に託児室を設けます。詳細は、58～59頁をご覧ください。



## の会場・時間帯一覧表

		第三会場 Ⅱ文学・語学部会(2) 文学系N棟2階202教室	第四会場 Ⅲ日本漢文部会 文学系N棟2階201教室
8 日 (土)	9:30~9:50	【開会式】 記念館2階	
	10:00~10:30		石橋 賢太(36)
	10:30~11:00	祝 世潔(27)	佐藤 由隆(37)
	11:00~11:30	羽田 朝子(28)	田宮 昌子(38)
	11:30~12:00	松村 志乃(29)	陳 文佳(39)
	昼 休	【記念撮影】 記念館前(雨天時:国際交流プラザ)	
		【各種委員会】文学系S棟1階各教室	
	14:00~17:00	【講演会】「寧楽と中国」 講堂	
	17:00~	【総 会】講堂	
18:30~	【懇親会】奈良国立博物館地下1階「葉風秦夢」		
9 日 (日)	9:30~10:00	李 乃琦(30)	中村 優花(40)
	10:00~10:30	岩本 真理(31)	楊 維公(41)
	10:30~11:00	伊藤 令子(32)	李 思漢(42)
	11:00~11:30	玉置奈保子(33)	稲森 雅子(43)
	11:30~12:00	千賀 由佳(34)	松村 茂樹(44)
	昼 休	【理事会】文学系S棟3階311教室	
	13:00~13:30	黄 偉豪(35)	楊 冰(45)
	13:30~14:00		
	14:00~14:30		
	14:30~15:00		
	15:10~15:40	【閉会式】 記念館2階	

( )内の数字は、発表要旨の掲載ページ。

## 研究発表・各種委員会等

		第一会場 I 哲学・思想部会 文学系N棟3階302教室	第二会場 II 文学・語学部会(1) 文学系S棟2階235教室	
8 日 (土)	9:30~9:50	【開会式】 記念館2階		
	10:00~10:30		大野 圭介 (22)	
	10:30~11:00	吉永慎二郎 (15)	宇賀神秀一 (23)	
	11:00~11:30	佐川 繭子 (16)	西川 ゆみ (24)	
	11:30~12:00	南部 英彦 (17)	趙 蕊蕊 (25)	
	昼 休	【記念撮影】 記念館前(雨天時:国際交流プラザ) 【各種委員会】文学系S棟1階各教室		
	14:00~17:00	【講演会】「寧楽と中国」 講堂		
	17:00~	【総 会】講堂		
	18:30~	【懇親会】奈良国立博物館地下1階「葉風泰夢」		
9 日 (日)	9:30~10:00		平田昌司 (26)	
	10:00~10:30	藤田 衛 (18)	【パネルディスカッション 2】(48)	
	10:30~11:00	李 蘇書 (19)		
	11:00~11:30	佐々木 聡 (20)	○浅見洋二・遠藤星希・ 甲斐雄一・狩野雄	
	11:30~12:00	竹中 淳 (21)		
	昼 休	【理事会】文学系S棟3階311教室		
	13:00~13:30	【パネルディスカッション 1】(46)	【パネルディスカッション 3】(50)	
	13:30~14:00		○野村鮎子・田口一郎・	
	14:00~14:30	青木洋司・許家晟・原信	和泉ひとみ・松村昂	
	14:30~15:00	太郎アレシャンドレ・ ○松野敏之		
15:10~15:40	【閉会式】 記念館2階			

( ) 内の数字は、発表要旨の掲載ページ。

\*パネルディスカッションについて

今年度の「次世代シンポジウム」は、パネルディスカッションの形態となっております。○は各パネルの代表者です。

日本中国学会第六十八回大会プログラム

第一会場（I 哲学・思想部会）文学系N棟三階三〇二教室

十月八日（土）午前

I・1 荀子の「心」における「性偽の分」とその礼義思想  
（十時三十分～十一時）

吉永 慎二郎（秋田大学名誉教授）  
司会 宇野 茂彦（中央大学）

I・2 『史記』における漢の受命について（十一時～十一時三十分）

佐川 繭子（國學院大學）  
司会 影山 輝國（実践女子大学）

I・3 班固の「天人之道」の思想について（十一時三十分～十二時）

南部 英彦（山口大学）  
司会 渡邊 義浩（早稲田大学）

十月九日（日）午前

I・4 『易緯』爻辰説の考察（十時～十時三十分）

藤田 衛（広島大学大学院）  
司会 辛 賢（大阪大学）

I・5 唐代以前における所謂重玄諸子の『老子注』について  
（十時三十分～十一時）

李 蘇書（東京大学）  
司会 山田 俊（熊本県立大学）

I・6 占書『礼緯含文嘉』の伝本とその特徴について  
（十一時～十一時三十分）

佐々木 聡（日本学術振興会特別研究員）  
司会 有馬 卓也（広島大学）

I・7 フランソワ・ノエル『中国哲学三論』『第三論文』における儒教倫理  
思想の西洋への紹介について（十一時三十分～十二時）

竹中 淳（筑波大学大学院）  
司会 三浦 秀一（東北大学）

十月九日(日)午後

【パネルディスカッション 1】(十三時～十五時)

「孝」の物語～中国近世・日本近世の事例

青木 洋司(國學院大學)

許 家晟(学習院大学国際研究教育機構PD共同研究員)

原 信太郎 アレシヤンドレ(早稲田大学非常勤講師)

○松野 敏之(国士館大学)



第二会場 (Ⅱ文学・語学部会1) 文学系S棟二階二三五教室

十月八日 (土) 午前

Ⅱ・1 『山海経』から『白沢図』へ

——あるいは漢魏における禹と黄帝—— (十時～十時三十分)

大野 圭介 (富山大学)

司会 佐野 誠子 (名古屋大学)

Ⅱ・2 『陶淵明集』の「集聖賢群輔録」をめぐる

(十時三十分～十一時)

宇賀神 秀一 (筑波大学大学院)

司会 林 香奈 (京都府立大学)

Ⅱ・3 北朝期の庚信詩賦における「長安」の描かれ方

——「見遊春人」詩をめぐる—— (十一時～十一時三十分)

西川 ゆみ (奈良女子大学大学院)

司会 原田 直枝 (南山大学)

Ⅱ・4 宋代の「以食喻詩」について (十一時三十分～十二時)

趙 蕊蕊 (大阪大学大学院)

司会 緑川 英樹 (京都大学)

十月九日 (日) 午前

Ⅱ・5 一九一六年の「文学革命」(九時三十分～十時)

平田 昌司 (京都大学)

司会 松浦 恆雄 (大阪市立大学)

【パネルディスカッション 2】(十時～十二時)  
中国古典詩における クロス・リーディング 精読の探求

○浅見 洋二 (大阪大学)

遠藤 星希 (青山学院大学)

甲斐 雄一 (日本学術振興会特別研究員)

狩野 雄 (相模女子大学)

十月九日(日)午後

【パネルディスカッション 3】(十三時～十五時)

詩人の伝記と批評はどのように形づくられるか——『列朝詩集小伝』を例に

○野村 鮎子 (奈良女子大学)

田口 一郎 (東京大学)

和泉 ひとみ (関西大学非常勤講師)

松村 昂 (京都府立大学名誉教授)

第三会場（Ⅱ文学・語学部会2）文学系N棟二階二〇二教室

十月八日（土）午前

Ⅱ・6 鄭伯奇を通して見る創造社——『少年中国』掲載の手紙を中心に

（十時三十分～十一時）

祝 世潔（京都大学大学院）

司会 濱田 麻矢（神戸大学）

Ⅱ・7 梅娘の描く「日本」——昭和モダニズムの光芒のなかで

（十一時～十一時三十分）

羽田 朝子（秋田大学）

司会 大久保 明男（首都大学東京）

Ⅱ・8 最晩年の茹志鵬——「跟上，跟上」（一九九一）を読む

（十一時三十分～十二時）

松村 志乃（日本学術振興会特別研究員）

司会 中野 知洋（大阪教育大学）

十月九日（日）午前

Ⅱ・9 玄応撰『一切経音義』諸本の研究（九時三十分～十時）

李 乃琦（北海道大学大学院）

司会 水谷 誠（創価大学）

Ⅱ・10 唐通事養成系資料の研究——語義分類による初歩的分析

（十時～十時三十分）

岩本 真理（大阪市立大学）

司会 木津 祐子（京都大学）

Ⅱ・11 「夢」と化した「異界」——『枕中記』の変遷を中心に——

（十時三十分～十一時）

伊藤 令子（京都大学大学院）

司会 土屋 育子（東北大学）

Ⅱ・12 武芸書と白話文学の交点（十一時～十一時三十分）

玉置 奈保子（京都府立大学大学院）

司会 岡崎 由美（早稲田大学）

II・13 白話小説中の僧侶と法力——白蛇伝と『平妖伝』を中心に——  
(十一時三十分～十二時)

千賀 由佳 (東京大学大学院)  
司会 堀 誠 (早稲田大学)

十月九日 (日) 午後

II・14 『文心雕龍・練字』における「単複」の概念と南朝書論および  
その審美観との関係 (十三時～十三時三十分)

黄 偉豪 (マカオ科技大学)  
司会 佐竹 保子 (東北大学)

第四会場 (Ⅲ日本漢文部会) 文学部N棟二〇一教室

十月八日(土) 午前

Ⅲ・1 山鹿素行の周濂溪批判 (十時～十時三十分)

石橋 賢太(国文学研究資料館共同研究員)

司会 市來 津由彦(広島大学)

Ⅲ・2 懷徳堂学派の知行論——五井蘭洲と中井履軒を中心に—— (十時三十分～十一時)

佐藤 由隆(大阪大学大学院)

司会 吾妻 重二(関西大学)

Ⅲ・3 亀井昭陽の楚辞学——『楚辞缺』『離騷』注に見るその特徴 (十一時～十一時三十分)

田宮 昌子(宮崎公立大学)

司会 矢田 尚子(新潟大学)

Ⅲ・4 明治初期の漢詩文雑誌における清人の詩文について——『新文詩』を中心に(十一時三十分～十二時)

陳 文佳(華東師範大学)

司会 市川 桃子(明海大学)

十月九日(日) 午前

Ⅲ・5 森槐南の中国戯曲観 (九時三十分～十時)

中村 優花(早稲田大学大学院)

司会 大木 康(東京大学東洋文化研究所)

Ⅲ・6 井上紅梅『金瓶梅』——支那の社会状態——が意味するもの (十時～十時三十分)

楊 維公(京都大学大学院)

司会 川島 優子(広島大学)

Ⅲ・7 大正期における和訳『桃花扇』について——山口剛と今東光の場合 (十時三十分～十一時)

李 思漢(京都大学大学院)

司会 齋藤 希史(東京大学)

Ⅲ・8 一九三〇年代の日中学術交流——孫楷第の訪日調査を中心に——

(十一時～十一時三十分)

Ⅲ・9 近代のポストン美術館に見る日中米文化交流について

——岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献

(十一時三十分～十二時)

十月九日(日)午後

Ⅲ・10 中国近代の美術理論における日本の影響

——李叔同「図画修得法」と柿山蕃雄・松山茂『図画教授法』の比較を通じて(十三時～十三時三十分)

稲森 雅子(九州大学大学院)

司会 稲畑 耕一郎(早稲田大学)

松村 茂樹(大妻女子大学)

司会 安藤 信廣(東京女子大学)

楊 冰(日本学術振興会特別研究員)

司会 大野 公賀(東洋大学)

特別講演会 講堂

十月八日(土) 午後(十四時~十七時)

「寧楽(なら)と中国——古代文字資料の世界」

木簡から見た日本古代の文字文化

館野 和己氏

(奈良女子大学古代学学術研究センター特任教授・木簡学会会長)

正倉院資料からみた古代日本の漢字リテラシー

杉本 一樹氏

(宮内庁正倉院事務所長)

## 発表要旨

### 第一部会（I 哲学・思想部会）

#### I・1 荀子の「心」における「性偽の分」とその礼義思想

吉永 慎二郎（秋田大学名誉教授）

本発表の要旨は次の四点にまとめられる。

一、荀子の「心」は「性偽の分」としての二面性を有する。従来の通説的見解（板野長八・児玉六郎・内山俊彦氏等）では、この「性偽の二面性を持つ心」を全て「性」に属するものとしてきた。しかし、荀子テキスト（正名・天論・性悪）に即して理解するならば、

性：性内の心（情・知）と能（先天的能力）

偽：性外の心（慮・智）と能（後天的能力）

と「心」は性の内外にわたることになる。

二、荀子は、性外の心（慮・智）と後天的能力、即ち「偽」によって人は善（礼義）を行う、とする。この性外の心は後天的心としての社会性と歴史性を有し、先人の「偽」の成果を学習・継承して己の「偽」を形成する。したがってこの「偽」の集積は「古」より「今」が勝ることになり、ここに尚古主義を超越する後王思想（古今の論理）が成立する。

三、一方で、荀子の礼義思想は礼義の成立を徹底して歴史的生成に委ねるのではなく、「聖人」の「偽」より生じたとする（聖人史観）に立つ。この聖人の偽による「礼義」の作為は、聖人の「心」が「道を知る」ことによる。この「道を知る」という「心」のメカニズムは「虚壹而静」「大清明」（解蔽）として説明される。これは「性偽」の合した心の全一なる働きとしての「知」と解される。かくして「聖人」の「偽」によって礼義が生じ、その教化・統治は「君子」に委ねられる。

四、この「聖人」の「偽」による「礼義」の作為は、「後王」の礼義の作為に道を開く論理となる。この「後王による礼義の作為」によって、〈古今の論理〉に立つ聖人史観が完成し、ここに天地・古今の世界に「人道」を立てる荀子の礼義思想の体系が成立する。

※本発表は平成二十八年度科学研究費補助金研究・基盤研究(c)の研究成果の一部である。



I・2 『史記』における漢の受命について

佐川 繭子（國學院大學）

『史記』儒林列伝に、景帝の御前で儒者が湯武の受命放殺について論争した話が見える。景帝にたしなめられ、あえて決着せずに終わったようだが、このように景帝期には漢が「受命」したという見解は定着していなかったし、「放殺」に似た経緯で帝位に即いた漢の正当化もされていなかった。同書の曆書には「王者易姓受命、必慎始初、改正朔、易服色、推本天元、順承厥意」とあり、これに基づけば武帝の改暦は漢の「易姓受命」を示す行為であると解釈することができる。なお、『漢書』律曆志には、武帝に改暦を勧める兕寬等の「帝王必改正朔、易服色、所以明受命於天也」という言辞が見える。

しかし、『史記』において、「易姓」は本紀の構成や内容には反映されているが、「受命」は「易姓」のようには反映されていないと見られる。『史記』と『漢書』とを比較してみると、『史記』には武帝が受命したようなことは言うが、高祖が受命したことは言わないのに対して、『漢書』は高祖も光武帝も受命したと明言している。『史記』は、その記載を統合的に読むことによって、漢が受命したと理解することが可能であることに止まる。司馬遷が太史公書を編纂執筆していた武帝期には、漢の正当化や、受命にまつわる理論形成が途上にあり、司馬遷自身も認識を明確にしていなかったものと考えられるが、今回の発表では、『史記』における「受命」に纏わる表現について考察し、漢代において漢が受命したという認識がどのように形成されたのか、その一端を探ってみたい。

### I・3 班固の「天人之道」の思想について

南部 英彦（山口大学）

後漢前期に『漢書』を著した班固（三二—九二）の学問を、『後漢書』班彪列伝上は「年九歳、能属文誦詩賦、及長、遂博貫載籍、九流百家之言、無不窮究。所学無常師、不為章句、举大義而已」と記す。ここから班固が、「九流百家之言」を学びながらも、今文家の「章句の学」を排して、五経兼修の立場から経書の大義を総合的に把握する古文派の学者であったことが知られる。

この班固の思想に関する最も注目すべき先行研究は、福井重雅氏の「班固『漢書』の研究」（『漢代儒教の史的研究—儒教の官学化をめぐる史的検討—』（汲古書院、一九九五）第三篇として所収）である。福井氏は、その第一章第一節において、『漢書』高帝紀下の賛に基づいて、班固の思想が、漢堯後説の標榜・漢火徳説の支持・『左伝』の偏重・讖緯思想の受容という四点から成り立つものであることを指摘する。また併せて、班彪「王命論」（『漢書』叙伝所収）に基づいて、班固のいづく思想のすべては実は父彪のそれを直接継承するものであったことを述べている。

発表者は、福井氏が指摘する班固の思想面の四要素に密接に関連するものとして「天人之道」の思想があったと考える。『漢書』眭兩夏侯京翼李伝の賛に「幽賛神明、通合天人之道者、莫著乎易・春秋」とあり、班固が、神明の働きを深く明らかにして「天人之道」に通じ合する最上の書物として、『易』と『春秋』の両書を挙げるのが目を引く。これは、『漢書』律曆志が載せる劉歆の「三統曆」に「易与春秋、天人之道也」とある見解を継承するものである。そこで本発表では、『漢書』等の班固の著作を用いて、班固の「天人之道」の思想を、劉歆の古学の継承という観点から明らかにする。併せて、福井氏が指摘する班固の思想面の四要素と「天人之道」との関わりを考察することとしたい。

独特な易理論を展開する『易緯』は、孟喜・京房の易学の流れを汲むものとされておられ、漢代易学の展開を知る上では欠かすことのできない書物である。しかし、それに反して、日本ではその思想の解明はそれほど進んでいないのが現状である。発表者はこれまで、「緯書の成立時期について」(『東洋古典学研究』三十九集)、『易緯乾鑿度』上下二巻に附された鄭玄注の真偽」(『同上』四十一集)を発表してきた。

今回は『易緯』の特質の一端を明らかにするために、爻辰説(二卦十二爻を十二辰に配当する説)について論じたい。これは漢代に発展した易論の一つで、京房は八卦の各六爻に十二支を配当し、鄭玄はそれとはまた異なる独自の爻辰説を展開している。『易緯』の爻辰説は、京房のそれとも、鄭玄のそれともまた異なる。本発表では、『易緯』に見える爻辰説を解析するとともに、京房の納支と鄭玄の爻辰説と比較し、その関係性を考察したい。

まず『易緯乾鑿度』(以下、『乾鑿度』)巻下に見える爻辰説を解析し、各卦の爻が如何なる規則に拠って辰に配当されていくのか言及する。また、『乾鑿度』巻下の最後の部分の注には、『乾鑿度』の爻辰説と「凶」と合致しない点を挙げている箇所がある。この「凶」とは、『易緯』の爻辰説を图示したものであろうが、それに当たる凶は現行本『易緯』には存在しない。しかしながら、その手掛かりになる記述が、『易緯稽覽図』(以下、『稽覽図』)巻下に存在する。『稽覽図』巻下の記述を参考にして、その「凶」の復元を試み、『乾鑿度』巻下の末注の意味するところを明らかにする。そして『易緯』には二系統の爻辰説が存在していたことを明らかにする。最後に、以上を踏まえた上で、『易緯』の爻辰説と京房の納支と鄭玄の爻辰説と比較し、その相違点を明らかにする。

I・5 唐代以前における所謂重玄諸子の『老子注』について

李 蘇書（東京大学）

一九四六年、蒙文通氏は「校理老子成玄英疏叙録」（『図書集刊』第七期）で晋代から唐代にかけての『道德経』の諸注のうち、「玄之又玄」に由来するいわゆる「重玄」思想を中心に注釈を施す道士らに注目した。蒙氏は更にこれらの道士を「重玄学派」と呼び、この重玄思想が当時の道教教義だけでなく、宋代にまで影響が及ぶといった重要性を述べた。その後、藤原高男・砂山稔・盧国龍・李剛らの研究者は蒙氏の視点を踏襲しつつ、南北朝末から唐代までの重玄派及び重玄思想に関する研究を一層深化させてきた。その結果、重玄思想及び重玄派は現在において中世道教思想を研究する際に見逃せない重要な課題とされる。一方、そのような見方、特に重玄派という教派もしくは学派が実在したかどうかに対して、中嶋隆蔵・山田俊・葛兆光など疑問を呈する研究者も少なくない。

本発表では、文献上初めて重玄思想とその代表者を提起する史料である唐代初期の道士成玄英『老子道德経開題序訣義疏』（敦煌文書P二三五三）、及び唐末五代の道士杜光庭『道德真経広聖義』（『正統道蔵』第二四冊）に見える「魏代孫登（現在の研究では孫登は東晋期の人とされる）：梁朝道士孟智周、臧玄靜。陳朝道士諸糶。隋朝道士劉進喜」、即ち「重玄の道を明らかにする」重玄諸子の『老子注』に焦点を当てることにより、そこに現れる思想が『老子道德経開題序訣義疏』に定義されている重玄思想に合致するか否かを検証する。さらにそれらの思想がいかに彼ら自身の思想の全体像と関連するか、またそういった思想が当時の道教思想の流れにおいてどう位置づけられるかを明らかにしたい。その上で、成玄英・杜光庭がそのような書き方をした真意についても考察したい。

I・6 占書『礼緯含文嘉』の伝本とその特徴について

佐々木 聡（日本学術振興会特別研究員）

発表者は近年、『礼緯含文嘉』の書名を持つ占書について調査を進めてきた。従来の研究では、『礼（緯）含文嘉』（魏・宋均注、『説郭』『古微書』『玉函山房輯佚書』等所収）は、緯書の書名として知られる。

しかし実は、近世以降、『礼緯含文嘉』の書名を持つ占書が撰述され、緯書とは別に流布していったらしい。『四庫提要』子部術書類存目二に採録される「礼緯含文嘉三卷」とは、この占書『礼緯含文嘉』を指し、そこには二種の伝本があったことが述べられる。また杜沢遜『四庫存目標注』（上海古籍出版社、二〇〇七）は、台湾国家図書館本・浙江省図書館本・北京大学図書館本・天津図書館本（以下、台湾本・浙江本・北京本・天津本と略称）の四部の伝本を挙げる。このうち台湾本については中村璋八「国立（台湾）中央図書館蔵『礼緯含文嘉』について」（『駒沢大学外国語部研究紀要』二五、一九九六）があるが、台湾本は巻一を欠く残巻本であり、その内容の検討は十全ではない。

そこで発表者は近年、四部の伝本を全て調査したところ、伝本は内容から三種類（①台湾本・浙江本、②北京本、③天津本）に分類でき、おそらく個別に成立したものであると分かってきた。その内容は、いずれも祥瑞災異思想を背景とし、天変地異や怪異から吉凶を占う点では、『開元占経』や『乾象通鑑』、『天元玉曆祥異賦』等の勅撰占書と共通する性格を持つ。その一方、おそらく在野で撰述されたためと思われる様々な特徴も見いだせる。例えば、かつて発表者は台湾本・浙江本中の数篇に見える、辟邪思想や博物学にかかる内容を紹介したことがあるが（『礼緯含文嘉・精魅篇』的辟邪思想与鬼神觀念）『復旦学報』二〇一四・五期等）、これらは勅撰占書には見られない内容である。

本報告では、『礼緯含文嘉』の伝本とその特徴を明らかにし、その背景にある近世社会と占術・術数学の関係について考察する。

I・7 フランソワ・ノエル『中国哲学三論』「第三論文」における儒教倫理思想の西洋への紹介について

竹中 淳（筑波大学大学院）

本発表では、清代の来華イエズス会士で、人文主義者でもあったフランソワ・ノエルがその著『中国哲学三論』*Philosophia sinica tribus tractatibus* 第三論文において、西洋古典哲学を活用して儒教の倫理思想をいかに説明しているかについて概要を述べる。ノエルは儒教とキリスト教の類似性を根拠に説明原理として西洋古典哲学の概念・用語を当てはめるに止まらず、両思想が基本的に一致すると論証しようと試みた。そのため朱熹『四書集註』はじめ、張居正の『四書直解』や陳澧の『礼記集説』といった複数の注釈を選択することで、キリスト教と両立しようとの解釈を導出しようとしている。こうしたやり方の背景には、西洋古典哲学のカトリックにおける独特の位置づけがあった。それは本来異教徒の思想であったものを、哲学というかたちで宗教と差異化を図ることで、かえってキリスト教の教理を支える土台としてきた歴史的経緯に基づく。イエズス会士は、諸注釈を駆使して儒教を異教としてではなく哲学と位置づけることで、基本的にキリスト教と矛盾しないことを示し、布教の効率化のために儒教を利用した初代中国伝導者マテオ・リッチ以来の布教方針を継承しようとしたのである。しかしながら、ノエルの場合、初期の宣教師たちと異なり、当代主流を占めていた儒教理解を誤ったものとは断せず、むしろ同時代の解釈をかなり正確に伝えようと努力している。場合によっては、ノエルは儒教的な世界観が、西洋古典哲学よりも一層、キリスト教に近いことを示そうとしているかにさえみえる。すなわち、アリストテレス思想においては神が一種の説明原理として利用されていたのに対し、ノエルが引く中国古典の解釈においては、天がキリスト教の神と対応するものと見なされ、より積極的に能動的な役割を果たす。そこでは天はあらゆる人間に生命や徳性を賦与する主体として描かれるのである。

## 第二部会（Ⅱ文学・語学部会）

### Ⅱ・1 『山海経』から『白沢図』へ——あるいは漢魏における禹と黄帝—— 大野 圭介（富山大学）

『山海経』は司馬遷が『史記』大宛列伝で『禹本紀』なる書とともに否定的な見解を示したが、これを初めて校訂した前漢末の劉歆は『尚書』禹貢を引いて「禹と益が九州を治水した際に得た知識をもとに著したものと云い、「古文の著明なる者」と称揚した。『山海経』自体を見ても、禹は名山を巡り歩き大地を歩測した人物として、また黄帝等とともに大荒の国々の祖先として描かれていて、その地位は高い。地理を知悉する神として禹を仰ぐ人々が『山海経』の成立に大きく与かっていると考えられる。

後漢以後、『山海経』に似た内容体裁の書物がいくつも現れた。後漢から魏晋にかけての成立とされる『神異経』『海内十洲記』は、ともに禹は九州を治水した神として登場する一方、黄帝の名は全く見えない。特に『海内十洲記』は『山海経』で黄帝と関連づけて描かれる鍾山を「天帝君之城域」と言い換えて描き、黄帝を意図的に無視している節さえある。一方六朝初期の成立とされる辟邪書『白沢図』は、その佚文から窺える限り『山海経』五蔵山経に似た文体で各種の精怪の性質を記している。この書に関して、黄帝が神獣「白沢」から鬼神や精怪の容貌を聞いてそれを図に描いて天下に示し、辟邪に役立てようとしたという伝説が『宋書』符瑞志などに見える。この伝説は『春秋左氏伝』に見える、禹が九鼎に百物の図を描かせて民が怪物の害に遭わないようにしたという伝説と同工異曲であり、『白沢図』は黄帝を祖と仰ぐ人々によって、いわば黄帝版『山海経』として編纂された可能性が高い。

『山海経』から『神異経』『海内十洲記』を経て『白沢図』に至る諸書から浮かび上がって見えてくるのは、巫祝や道士の間における禹信仰と黄帝信仰の対立・消長である。本発表でその流れを追っていきたい。

II・2 『陶淵明集』の「集聖賢群輔録」をめぐる

宇賀神 秀一（筑波大学大学院）

汲古閣旧蔵『陶淵明集』や李公煥『箋注陶淵明集』などには、巻七から巻十にかけて「天子孝伝賛」や「諸侯孝伝賛」などの「五孝伝」、及び「集聖賢群輔録」、一名「四八目」という作が収録されている。両作の由来は、北斉の陽休之「陶潜集序録」に「其集先有兩本行于世。一本八巻無序。一本六巻并序目……。蕭統所撰八巻、合序目伝誅、而少五孝伝及四八目……。以為三本不同、恐終致忘失。今録統所闕并序目等、合為一帙十巻」と述べられているように、陽休之が当時通行していた二本の別集から、蕭統本に補ったものである。

両作については、『四庫全書総目提要』が偽作と断じて以来、陶淵明研究においては彼の作として取り上げられることは殆どなかった。ただ、両作が淵明に仮託された偽作に過ぎなかったとしても、「集聖賢群輔録」には三十種以上の著述と、その一部分が引用されている。それらが遅くとも陽休之の時代の形を伝えているものだとすれば、少なくとも校勘、輯佚の材料にはなり得る。「集聖賢群輔録」は、こうした観点から古くは王応麟、近年でも安居香山・中村璋八氏や永田拓治氏などによって利用されてきたところであるが、「集聖賢群輔録」の記述態度や逸文の再調査など、なお検討すべき余地があるように思われる。また、四庫提要の偽作説は、近年においては否定的に捉えられており、仮に両作を淵明の作として考察対象に加えられるのであれば、これまで淵明詩文の研究のなかでは殆ど取り上げられなかった以上、両作には淵明の新たな一面を見出し得る可能性が含まれているものと推定される。

本発表は、「集聖賢群輔録」の資料的価値を再検討していくことを主眼に据えるものである。併せて、四庫提要の偽作説を確認し、淵明の作として読み得る可能性を示した上で、「集聖賢群輔録」を踏まえて浮かび上がる陶淵明像について、若干の言及を試みることにしたい。



## Ⅱ・3 北朝期の庾信詩賦における「長安」の描かれ方——「見遊春人」詩をめぐる

西川 ゆみ（奈良女子大学大学院）

北朝期の庾信は、終生長安で羈旅の思いを持ち続けていた、と一般的に理解されている。しかし庾信は、流寓の地という負の認識とは一線を画する「長安」へのまなざしも持っていたのではないだろうか。

そもそも北朝期の庾信作品には、「長安」がいかに描かれているのか。本発表では、梁に在った時期の作品と北朝期の作品を比較して、その「長安」の描かれ方の変化を分析し、庾信の「長安」認識の転換について指摘する。その上で、北朝期に作られた「見遊春人」詩の新しさ、庾信後期文学が獲得した表現について考察を試みる。

梁の詩人たちの間では長安と洛陽とは混同してイメージされ、長安・洛陽を描く作品には、春の季節描写が多く見られる。また、都の繁華なさまを描き出すために、潘岳・石崇の故事が好んで用いられている。こうした「長安」像からは、南朝の人々の古都「長安」に対する羨望と、自身は「長安」の華やかな貴族文化を継承する存在であるという自意識を窺うことができる。

ところが、北朝期の庾信の作品では、「長安」に対する羨望は見られなくなり、その代わりに失望が詠われるようになる。「擬詠懷詩」では、自身を荊軻と李陵蘇武になぞらえることで、自身の長安での羈旅生活を辺境への出征であるかのように表現している。中でも、特に注目すべきは「怨歌行」において、長安＝胡、金陵＝漢という構図を打ち出していることである。

ただし、北朝期の春を詠ずる作品、とりわけ奉和詩では、梁に在った時期と同様の表現手法を用いているものもある。さらに「見遊春人」詩は、梁からの手法を踏襲しながらも、新たな要素を取り込み、南朝では表現しえなかった現実の「長安」の姿を描こうとしている。「見遊春人」詩が生まれた背景を、庾信の長安認識の変化と、「見る」行為の二点から考察したい。

## Ⅱ・4 宋代の「以食喻詩」について

趙 蕊蕊（大阪大学大学院）

中国の詩歌批評において「味」の比喩は極めて重要な位置を占めてきた。いわゆる「詩味」説である。では、その「味」と不即不離の関係にある、日常の生活に即した行為である「食」の比喩についてはどうであったらうか。

「食」の比喩を用いた詩歌批評を清の袁枚は「以食喻詩」と称した。この批評方法が数多く用いられるようになるのは宋代である。なかでも独創的で影響力が大きかったのは、歐陽修、梅堯臣、蘇軾等の批評である。彼らは、具体的な食物や摂食行為をイメージ豊かな比喩として詩歌批評に用いることによって、従来の「詩味」説に新たな展開をもたらしたのである。そこには中唐から宋代にかけての文人の生活や嗜好の変化が重要な役割を果たしていたと考えられる。

本発表では、中唐の韓愈、孟郊等の「食」をめぐる発言をも視野に入れながら、宋代の詩歌批評における「以食喻詩」とその背景について、若干の私見を述べてみたい。

## II・5 一九一六年の「文学革命」

平田 昌司（京都大学）

一九世紀アメリカのポストンでは、女性も文学の書き手となることができた、しかしレトリックの研究と実践は男性専属の領域であった、という指摘（D. C. Broaddus）がある。中国古典文学の世界においても、文体・レトリックをめぐる議論は、めざす目標の高雅・低俗を問わず、男性の作法と教養を背景とする世界での話題だった。

一九一六年、アメリカ留学中の胡適（コロンビア大学）・梅光迪（ハーバード大学）・任鴻雋（コーネル大学）が交わした「文学革命」の論戦を『胡適留学日記』や当事者の書簡から再構成すると、以下のとおり、前段の要約に合致していることが確認できる。（一）胡適の「文学革命」は、語彙・文体への俗語の導入を主張しているにも関わらず、ハイカルチャー的な文化・道徳・テキストの枠内で語られており、野卑さを回避する傾向がある。（二）特に胡適・任鴻雋にとって古典的な詩や詞の創作や相互批評はごく日常的な行為であり、一九一六年の「文学革命」の核心は詩をめぐるレトリックにあった。（三）「文学革命」の進行過程を女子留学生である陳衡哲も傍観していたが、論戦そのものには直接加わることなく距離をおいている。また、（四）一九世紀後半の印欧比較言語学には、マックス・ミュラーを中心として、古典ギリシア語・ラテン語よりも現代語のほうが優れた表現手段だとする主張が現れ、その影響力を拡大していた（J. Dowling）。以上をまとめれば、「文学革命」は、もともと一九世紀アメリカ東海岸および英国の上流階級文化、中国古典文学、いずれの規範からみても許容される範囲での主張だったと言える。

一九一七年の胡適「文学改良芻議」公表に始まる、中国本土に移植された文学革命は、アイビー・リーグと北京大学との置かれた社会環境、参与者たちの知的背景などに起因した質的変化を起こしたもので、前年の論戦との間に不連続性が認められるのではないか。

II・6 鄭伯奇を通して見る創造社——『少年中国』掲載の手紙を中心に 祝 世潔（京都大学大学院）

創造社についてはこれまでに、途中の転向・「浪漫主義」というレッテル・大正文学の影響・上海の出版資本との関係などをめぐる研究や、メンバーの郭沫若・郁達夫・成仿吾などの文学作品を通して考察が蓄積されている。

本発表が取り上げる鄭伯奇は、『新文学大系小説三集・導言』の執筆者として知られ、その回想文等は数多くの創造社研究に用いられてきたが、この人物を通して創造社を解読する試みは行なわれなかった。本発表は鄭が一九二〇年七月に『少年中国』雑誌に発表した手紙に着目し、彼のもつ哲学思考及び文学主張を以下の三点に整理し、創造社の思想的土台を解明する大きな手がかりを有する人物として再評価を試みようとするものである。

まず、鄭は当時中国の時代背景を考えた上で浪漫主義を拒絶し、生命力溢れる文学を用いて国民性を改造すべきだと主張する。これは創造社が「浪漫主義」と理解されてきたことに対する有力な批判の一つになる。

次に、鄭は「生」と「愛」によって「人生の謎」が解決できると積極的に考えたことが挙げられる。この人生観は、「生」と「愛」の喪失を描き続けた創造社の文学とは、あたかも鏡に映し出される二面性の如き関係であったと考えられる。

さらに、鄭は「文化」を媒体に「自我の拡大」と「世界の創造」を繋ごうとした。「自我」と「創造」はまさに創造社の旗印であったが、鄭の主張は、創造社の情緒的なモットーを哲学的な理論で裏付けるものであった。

京都帝国大学哲学科に留学し、系統的な哲学思考の持ち主であった鄭は一見すると、自己情緒に走る創造社の文学とは相容れない異質な存在に見えるが、思想的基盤と多くの点で一致していることがわかり、鄭は、単なる傍観的な観察者ではなく、創造社の哲学基礎の構築を担った人物であった。彼を通して見ることで、創造社全体の性格がより鮮明になることが期待できる。

## II・7 梅娘の描く「日本」——昭和モダニズムの光芒のなかで

羽田 朝子（秋田大学）

満洲国の代表的な女性作家である梅娘（一九二〇～二〇一三）は、一九三〇年代後半から四〇年代初頭にかけて日本に滞在している。日本経験は梅娘の文学活動にも大きな影響を及ぼしており、日本ではもちろん帰国後の日本占領下の北京においても、日本文学の翻訳や日本を舞台にした小説を複数発表している。

梅娘は大東亜文学賞を受賞し、日本と深い関わりをもったことでも知られることから、先行研究では梅娘が描く「日本」について大きな関心を寄せてきた。しかし梅娘の政治的身分のとらえ直しに関心が集まるあまり、梅娘が日本の植民地支配の抑圧や、戦時の動員や不景気といった日本社会の暗部を描きだしたことにのみ焦点が当てられる傾向にある。

これに対し本発表が注目するのは、梅娘が日本に滞在した時期とは、日本社会が総動員体制に呑みこまれる過程にあったものの、都市を中心に昭和モダンと呼ばれる消費文化が最後の光芒を放った時代でもあった点である。そしてその特殊な時代性は、梅娘の日本での文学経験や日本を背景にした作品の中に色濃く反映されている。

これを踏まえ、本発表ではまず梅娘の翻訳活動を通じてその日本での文学経験について考察する。とくに当時日本の各メディアで数多く発表されていた日本作家による満洲国訪問記の翻訳のほか、梅娘の日本滞在時に大ベストセラーとなり映画化されて話題を呼んだ細川武子『女学生記』（有光社、一九四一年三月）の翻訳に着目する。

その上で日本を背景にした作品群——「僑民」（『新満洲』三巻六期、一九四一年一月）、「女難」（『大同報』一九四一年十月二九日）、「異国篇」（『中国文学』一卷八期、一九四四年八月、長篇小説『小婦人』の一篇）を分析し、梅娘の描く「日本」について再考する。そして梅娘がどのように満洲国と日本の関係性を見つめ、作品化したのかについて検討する。

II・8 最晩年の茹志鵬——「跟上，跟上」（一九九一）を読む

松村 志乃（日本学術振興会特別研究員）

茹志鵬（一九二五—一九八〇）は、中華人民共和国成立後の一九五〇、六〇年代と文化大革命後に活躍した上海の文学者である。没落した家庭に生まれた茹志鵬は、貧しい幼少期を経て、新四軍に参加、建国後は『文芸月報』の編集を務めた。五七年に夫で劇作家の王嘯平が批判を受ける中、地方紙に掲載された「百合の花」（五八）が茅盾に高く評価された。その後本格的に創作の道に入った茹志鵬は、文革期は筆を擱いたが、七〇年代末より創作を再開。「つなぎ違えた物語」（七八）等が広く知られ、「知識青年」作家として文壇に登場した娘王安憶と共に上海文壇を牽引した。

文革後の茹志鵬は八〇年代半ば頃までは旺盛に創作を行っていたが、その後ほとんど文章を発表していない。本報告で取り上げる「跟上，跟上」（九一）は、これまでほとんど論じられていないが、管見の限り茹志鵬の最後の小説である。「跟上，跟上」は、茹志鵬の得意とする時の流れを交錯させるといふ手法をとりながら、執筆と育児に追われた壮年期や解放軍時代の記憶、文革後の下の世代との相克、老幹部としての問題意識などを描いたやや思弁的な小説である。だがこれらは茹志鵬が長年問題にしてきたモチーフであり、その意味で、「跟上，跟上」は彼女の小説創作の集大成と考えられる。また「六四天安門事件」から間もない時期に書かれたことも注目される。

報告者はこれまで「児女情」（八〇）を中心に文革後の茹志鵬文学を、王安憶と関連づけながら親子の対話と応答という視角から考察していたが、調査が不十分で、「跟上，跟上」を七〇年代後期の創作と見做していた。そこで「跟上，跟上」を茹志鵬の最晩年の作品と位置付け、作品にその創作人生がいかに関わっているかを読みとくことで、建国期から四十年あまりを文学創作と共に生きた文学者茹志鵬の思想を再考したい。

## II・9 玄応撰『一切経音義』諸本の研究

李 乃琦（北海道大学大学院）

本発表は、玄応撰『一切経音義』（以下、玄応音義という）について、日本に現存する多数の古写本を取り扱い、注釈の異同により、書写関係と系統分類を検討するものである。

玄応音義は、唐代に編纂され、完本で二十五卷、約九四三〇の掲出項がある。玄応音義は現存する最古の仏典音義であり、唐代初期の漢字音が反映されており、四五〇以上の仏典を収録することから、当時通行していた仏典の種類や内容を窺うことができる。玄応音義には主に日本の写本（手書き）と中国の版本（木版印刷）が現存する。またフランス・イギリス・ドイツ・ロシアには敦煌・吐魯蕃から渡来した古写本の断片群が保管されている。

玄応音義は日本に伝来した後、盛んに書写された。山田（一九三二）により、日本古写本である大治本に高麗本系や中国版本である宋版系よりも玄応音義の古い本文が残っていることがわかっている。日本に現存する玄応音義は書写年代・地域によって、内容が若干異なっている。そのような玄応音義諸本間の相違点は、当時、書写作業に携わった僧侶らにより増補・省略・改編されたものと考えられる。また、上田（一九八一）、佐々木（二〇一四）の研究により、玄応音義の日本写本と中国版本が別々の系統に属することが明らかになった。現在、日本に現存する平安時代以後の玄応音義の古写本に、少なくとも二つの系統が想定されている。個別の巻の系統分類については、これらの先行研究により解明されたが、他の巻も含めた玄応音義日本古写本全体を対象とした系統分類は未解決のままである。

本発表では、まず完本である高麗本と日本に現存する玄応音義古写本（金剛寺本、七寺本、大治本、西方寺本、正倉院本、天理図書館本、東京大学本、京都大学本、広島大学本）を研究対象として、「一切経音義全文データベース」を構築する。次に、諸本に異同のある注釈を抽出して比較する。最後、異同を集計・分析した上で、諸本間の書写関係と系統分類の推測を試みる。

## II・10 唐通事養成系資料の研究——語義分類による初歩的分析

岩本 真理（大阪市立大学）

近年、唐通事養成に直接的に関与したと考えられる資料の発掘や、翻刻による資料の公開が進んでいる。これらは、初級段階を終えたレベルの学習者が想定され、長文読解の教科書とみなしうるものである。これらの写本資料に見られる言語上の特徴は、単語や三字話、四字話などのフレーズを主とした唐話辞書中の収録語彙と、果たして一致するものであろうか。本発表では、唐通事養成系の写本資料を中心に、収録語彙全般を対象として、語義分類に基づく分析を行い、資料間の統一性について取り上げるとともに、単語・フレーズの収録を旨とした唐話辞書中の収録語彙との対照を行って分析を加え、それぞれの特徴について考察する。また、唐話辞書のうち、フレーズの収録を主眼としながらも、末尾に「長短話」を付録とする資料もみられ、この類の資料についても、本体語彙と付録部分の語彙の差異について言及する。

なお、語義分類に基づく研究には、つとに太田辰夫（一九六三）『兒女英雄伝』語彙調査（『清末文学言語研究会会報』三）があり、方言語彙調査での分類基準に則して、同資料中における同義語・類義語の出現状況をくまなく明示している。この調査方法は同一資料中の文体差などを浮き彫りにする手立てとしても優れており、広く応用すべきものと発表者は考えている。本発表はこの手法にならない、語義分類に基づいて初歩的な分析を加えるものである。



唐代伝奇『枕中記』は、主人公盧生が道士から渡された枕で眠り、枕の中の異界で生涯を過ごして、目を覚ますと数分しか経っていないかったという内容である。先行研究においても、盧生が自分の一生を「夢」見ていたことは暗黙の大前提とされ、『枕中記』をふまえた「邯鄲夢」という語の存在もその前提を補強する。しかしこの前提は『枕中記』成立時点で存在していたのか、『枕中記』の異界と夢とが結びつく過程について、再検討する必要があるのではなからうか。

『枕中記』と同時代の類話『桜桃青衣』、『沈亜之』は、本文中に「夢」が明示されており、眠りによる「夢の世界」への進入や唐突に訪れる覚醒といった点において、我々が通常想像する一般的な夢と差異はあまりない。一方原形に近いテキストとされる『文苑英華』所収の『枕中記』では、盧生の異界への越境の際、枕の穴という異界に通じる物理的入口が出現し、また話中の異界が夢であるとの明確な記述も存在しない。

ところが十一世紀以降、『枕中記』をふまえた「邯鄲夢」という詩語が文人により用いられるようになり、更に十二世紀、洪邁の『容齋隨筆』は、「黄粱夢」という語で『枕中記』を代表する。そのころには既に、『枕中記』の「枕の中の異界」は明確に「夢」と見なされていたのである。

『枕中記』が明確な「夢」の物語とされて以降、元雜劇『邯鄲道省悟黄粱夢』や清代の『聊齋志異』所収の「続黄粱」といった翻案作品が描く異界もまた、一般的な「夢」へと同質化していく。『枕中記』成立時点では、何者とも定義されていない異界が、後々の意味付与により「夢の世界」に収斂されていくのである。そこには異界を支える数多の要素が整理され、受容が容易な形に変容する過程が窺える。本発表ではその過程を考察し、合わせて日本における『枕中記』の受容の形から、その変容の本質が何であるかを明らかにしたい。

## II・12 武芸書と白話文学の交点

玉置 奈保子（京都府立大学大学院）

当研究では、日用類書武備（演武）門に収録されている歌訣について、主に宋太祖趙匡胤に関わるものに着目し、通俗文学が武芸書に与えた影響及びその関係性について検討を行う。

近年、白話小説研究において、雑劇・鼓詞・宝卷などの演劇や民間芸能テキスト、並びに日用類書などの通俗書籍の利用はますます重視されている。中でも、特に通俗的な内容の武芸書を利用し製作されたと推測される日用類書武備（演武）門収録の歌訣には、薛仁貴や花関索などの白話文学の重要登場人物の名と故事が幅広く見られ、とりわけ趙匡胤と楊家将に関わるものが多い。ここからは白話文学が武芸書に与えた影響や、当時民間に流布していた故事の様子が窺い知れる。

だが、武芸書と白話文学の関係は、これまで研究対象としては注目されてこなかった。その主な原因は二つある。一つは白話小説の描写上の問題である。『三国志演義』や『水滸伝』をはじめ、好漢達の闘いを描く白話小説は数多くあるが、その戦闘描写は、主人公の武功を語るというその物語の性質に反して簡素であることが多い。演劇や講談の類では或は役者により演じられ、或は言葉を重ねて活写される戦の有様は、白話小説へと改変される過程で、文藻の洗練や経費節減の為に削られる運命にある。もう一つは文学資料としての武芸書の研究がほぼ行われていないことである。前述のような白話小説の状況ではそれも当然である。

しかし趙匡胤を主人公とした清・呉璿『飛龍全伝』には、武芸書に掲載されるような知識を用いたと思しき戦闘描写が存在する。それはおそらく、武芸の世界に伝わる好漢・趙匡胤の戦闘方法が、白話小説化の過程で取り込まれたためであると推測される。このように、武芸書が白話小説の戦闘描写に影響を与えることも当然有りうると考えられる。

以上の状況を踏まえ、本発表では日用類書と『飛龍全伝』等の白話文学の比較から、特に趙匡胤像の演変を中心に考察を行う。

## II・13 白話小説中の僧侶と法力——白蛇伝と『平妖伝』を中心に——

千賀 由佳（東京大学大学院）

明清小説中に僧侶が登場する例は多いが、そのほとんどが『僧尼孽海』に代表されるように淫僧として描かれていることについては、しばしば言及されてきた。一方で、『警世通言』巻二十八「白娘子永鎮雷峰塔」では金山寺の法海禪師がその法力を以て、美女に化した白蛇を退治する。また『平妖伝』には、天書を通じて法术を習得した蛋子和尚が登場するのみならず、諸葛遂智という老僧が出てきて「正を以て邪を破り」、王則の乱鎮圧に功績をあげる。上の二つの作品は、白話小説中では従来道士の担うイメージが強かった「法力を発揮して妖怪（妖人）を退治する」役割が、僧侶によって担当された例といえる。こうした場面において僧侶がどのような描かれ方をされるのか、またこのような現象の背後にどのような事情があったのかは、ともに興味深い問題である。諸葛遂智が異人から伝授されたという「五雷天心正法」や、法力を発揮するときの動作である「念動真言」といった表現は、他の小説中で法术を操る道士を描写するときの常套句でもあり、この作品ではまさに道士に負わされるのと同じ役割を僧侶が担い、描写においても共通の表現が用いられていることがわかる。また白蛇伝の物語と禪宗の伝承の密接な関連については既に論じられているが、明の類書『三教搜神大全』には禪師の伝が大量に含まれており、蛇退治やその他の神異をめぐる逸話が多々みられる。この種の書物の検討を通じて、同時代の人々の僧侶に対するイメージについても見直しを行なっていく必要があるのではないだろうか。本発表では、同時代に淫僧の物語があふれる中で、姦淫とは無縁なばかりか法力によって妖怪を退治する「正しい」僧侶の物語がどのような位置づけと意義を持っているかについて確認したい。

黄 偉豪（マカオ科技大学）

「単複」という文学批評概念は、『文心雕龍・練字』の中で、文字の使用法・言葉の選び方と句法・構成が互いに結合していることに關する一種の修辭技巧を指す言葉として使われている。注目すべきは、著者の劉勰が文中で字形の「瘠」および「肥」という表現を用いて「単複」という概念が持つ具体的な意味を説明している点である。ここで述べられている字形上の「瘠」「肥」とは、画数が多いか少ないか、また画数に呼応する形で各字体が占める空間が大きいか小さいかを意味し、このことによって視覚効果上の「瘠」と「肥」が生まれるというものである。言い換えると「瘠字」は「単」、「肥字」は「複」である。造形・配置的角度から言えば、様々な「瘠字」と「肥字」を織り交せてつなげながら語句を構成することで、全体の見た目にもまた多様な審美的効果が生み出される。そのため書き手は、吟味を重ねつつ様々な「瘠字」と「肥字」を交えて文章を作り、視覚効果上の不足や過多を避けるべきだとされる。つまり、『文心雕龍・練字』が指す「単複」とは、漢字の構造が持つ特徴と文学創作および批評・鑑賞方法の一種の結合であり、また「創作論」と「批評論」の文学批評概念をも兼ね備えているといえる。また、「単複」および「瘠字」「肥字」の概念の提示は、『文心雕龍』を極めて特別な文学批評概念にしているだけではなく、劉勰以前あるいは以降の六朝文学批評の中でも稀有な知見であることから、こうした概念を提示した始祖は劉勰である可能性が考えられる。

筆者は、『文心雕龍・練字』の「単複」の概念と「瘠」「肥」の比喩が南朝、特に劉勰が生きていた梁朝の書法概念および審美観と非常に一致していることを発見した。さらに、「単複」および「瘠字」「肥字」というこの文学批評概念は、梁朝から南朝にかけての書論における書法の字体構造や墨の使い方などの審美的概念から生じ、転用されたのではないかと考える。

### 第三部会（Ⅲ日本漢文部会）

#### Ⅲ・1 山鹿素行の周濂溪批判

石橋 賢太（国文学研究資料館共同研究員）

山鹿素行（一六二二〜一六八五）は、朱子学を批判した儒者として知られている。素行の思想が反朱子学と目されるようになってきたきっかけは、寛文六年（一六六六）に赤穂に配流されたことにある。これは、前年に公刊した『聖教要録』が、熱烈な朱子学信奉者である保科正之（一六一一〜一六二七）の逆鱗に触れたことに由来する。この一件から山鹿素行＝朱子学批判は定説化することになり、後の研究者も素行の思想をもっぱら朱子学との対比から捉えようとしている。

しかし、このような素行と朱子学とを対立的に捉える見方には、検討の余地が残されているのではないだろうか。たとえば、『聖教要録』には朱子（一一二〇〜一二〇〇）その人を高く評価するような言葉が残されている。素行対朱子学という一元的な図式だけでは、こういった言葉は理解し切れないのではないか。

そこで注目されるのが、素行が朱子学に最初に違和感を持った機会とされている、寛文二年（一六六二）八月十九日のエピソードである。ここで、素行は『近思録』所収の『太極圖説』を読んだ際に、周濂溪（一〇一七〜一〇七三）の「無極」の語に対して疑問を持ったことを述べている。もし、多くの先行研究が指摘するように、これが素行が独自の思想を打立てる契機となったのであれば、素行の出発点は周濂溪に対する違和感にあることになる。

このように考えれば、素行の思想において朱子だけでなく周濂溪への批判も重要な意味を持つと考えられる。だが、ほとんどの先行研究は周濂溪を取上げずに、朱子との対比に終始してしまう。本発表はそのような現状に一石を投じるため、素行の思想を周濂溪への批判として捉え直した上で、読み解いていく。また、それにより素行の思想と朱子学との関係も問い直していく。

享保九年（一七二四）、江戸期の大坂において現地有力町人によって設立された懷徳堂。同十一年には官許を得ることで、半官半民の学問所として勢力を誇った。この学問所の学者達に見られる思想的特色とは何か。先行研究においては、中村惕斎（二六二九—一七〇二）の「知行兼進」・「博約並進」という穩健着実な学風を継承し、より実践的・実学主義的な傾向へと発展を遂げた、ということが既に指摘されている。しかし、こうした「知行」を「並進」していくという思想が、具体的にどのような学術態度として反映されたか、またこの思想自体の儒学史における意義は何か、ということが、現時点において十分に説明されているとは言い難い。

そこで、本発表においては、懷徳堂の初中期を代表する五井蘭洲（一六九七—一七六二）と、その門人の中井履軒（一七三二—一八一七）の知行論を取り上げ、その思想が大いに反映されたものとして、彼らの「格物致知」解釈を考察する。

とりわけ中井履軒の「格物致知」解釈は、彼独自の説として知られ、西洋のプラグマティズム（実用主義）に通ずるところがあるとまで言われている。この解釈は、じつは五井蘭洲にも共通して見られるものなのである。そしてその根底には、「知」と「行」とを「並進」しなければいけない、という理念が確かに存在しているのである。

現在の一般的な理解としては、朱子学派の基本的なスタンスは「先知後行」として認知されているが、「知行並進」という理念もまた、主流とはならなかったと思われるものの、初期の頃から朱子学派の中で提唱されていたようである。本発表では、近世儒学史における知行並進論の継承と発展の可能性について、一つの仮説を立てるところまで試みたい。

Ⅲ・3 亀井昭陽の楚辞学——『楚辞缺』『離騷』注に見るその特徴

田宮 昌子（宮崎公立大学）

発表者は、日本楚辞学の黎明期である江戸・明治期の楚辞関連著述の研究を目指すグループ研究の一環として、亀井昭陽『楚辞缺』に取り組んでいる。

当該グループ研究は、まず、写本・手稿本の形態に留まるこれらの著述を活字データ化し、研究資料として利用しやすい形態で公開し、これら著述への学界の関心を広く喚起すること、次に、これら資料を活用した研究実践を通して、楚辞学史および日本漢学史における黎明期日本楚辞学の意義と成果を明らかにしようとするものである。

本発表では、亀井昭陽『楚辞缺』写本についての基礎的作業を踏まえて、『楚辞缺』巻頭を飾る「離騷」篇に加えられた注文を読み込み、昭陽の楚辞学如何なる特徴が見られるかを報告したい。

「離騷」篇は屈原賦の代表作であるだけでなく、楚辞という文学ジャンルの祖にして最高傑作である。楚辞集を編み、注を加える撰者が最も意を用いる篇であることは間違いない。その「離騷」篇注文を詳細に検討することによって、昭陽の楚辞学の特徴を考える重要な手がかりを得たい。

先行研究における言及の中で、『楚辞缺』は中国歴代注釈の単なる取捨選択ではなく、徂徠学の流れを汲む古文辞学の成果であり、先秦文献や古言への豊富な知識に基づいた独自の考証が見られる著述としての評価がある（竹治貞夫等）。

一方、「鎮西の大家」として知られた亀井南冥の学を承けた長子・昭陽の『楚辞缺』執筆には、寛政異学の禁の中の南冥の失脚と非業の死、昭陽の閑職への左遷など、亀井家学が直面した「不遇」を念頭に「屈騷精神を自らの抛り所とし、屈騷の伝統を受け継ぐことを選んだ」といった推測もなされる（朱新林等）。

しかし、先行研究におけるこれらの言及は十分な具体的論証を伴うとは言えず、印象論に留まる感がある。本発表では、「離騷」篇注文についての具体的検討を通して、昭陽の楚辞学の実像を明らかにし、その学術的意義を考えたい。

Ⅲ・4 明治初期の漢詩文雑誌における清人の詩文について——『新文詩』を中心に

陳 文佳（華東師範大学）

漢詩人森春濤（一八一九—一八八九）、森槐南（一八六三—一九一一）父子が編集した『新文詩』（百集）、『新文詩別集』（廿八集）、『新新文詩』（十九集）シリーズは明治初期において最も影響力のある漢詩文雑誌である。『新文詩』シリーズは主に春濤が興した茉莉吟社の詩人たちの詩文を集めたものだが、当時の滞日清国人の詩文も収めている。森春濤及び茉莉吟社の詩人たちは清国駐日公使の何如璋、副公使の張斯桂、参贊官の黃遵憲、また随員の沈文熒（号梅史）などの清国外交官と交遊・唱和をしていた。何如璋は光緒三年（明治十年、一八七七）初代駐日公使として東京に赴任後、自ら春濤宅を訪れたこともあり、春濤との間に唱和作を残した。また、春濤は当時文名が高い黃遵憲に息子の槐南が書いた『補春天伝奇』という本の校閲と序文の執筆を頼み、黃氏との間に幾度も手紙のやり取り（『新文詩』五十五集、五十七集、六十二集所収）をし、親交を深めていた。明治十五年（一八八二）、何如璋、張斯桂は解任帰国。黃遵憲はサンフランシスコ総領事に転任。何氏らが日本を離れる際、春濤一派の漢詩人は多数の送別詩を手向けている。『新文詩』別集十六号は即ち双方の送別・留別詩を集めた特集である。

一方、春濤一派の漢詩人は王治本（号黍園）・王藩清（号琴仙）兄弟、葉煒（字松石）などの滞日清国文人との交遊もある。王氏兄弟また葉煒は功名も官職もない布衣の身分で日本に渡来し、詩・書・画などの領域で活躍していた。春濤は彼らとの交わりを厚くし、双方の唱和詩、また往復書簡の一部を『新文詩』のなかに掲載した。

拙文は『新文詩』所収の清人の詩文及び書簡から着手し、明治初期の漢詩人と清国の外交官・文人との間の交流状況、また当時の滞日清人（黃遵憲、王治本、葉煒など）の文学・社会活動について考察を加えたいと思う。



### Ⅲ・5 森槐南の中国戯曲観

中村 優花（早稲田大学大学院）

森槐南（一八六三—一九一一）は中国学の先駆けと言える人物であり、詩人としても知られている人物である。戯曲においても創作のみならず研究の先駆け的存在で、研究に関連する著作も残されている。しかし彼に関する研究については、まだ緒についたばかりと言えるだろう。森槐南は、中国戯曲をどのような位置づけで捉え、その概念の枠組みを構築していたのか考察する。

まず、彼の著作に関する分析を行う。彼の創作した作品において、下敷きとなる物語が存在することが多い。『深秋草』は牡丹亭の曲牌を利用し、『補春天伝奇』に関しても、王人恩の「森槐南与『紅樓夢』」では『補春天伝奇』と『紅樓夢』との関連が指摘されている。また、戯曲そのものが韻文と散文交じりの形式であることも、注目すべき点である。彼の填詞能力を発揮し、ある程度自由に物語をいじることができるとは創作に寄与したのであろう。

次に森槐南にまつわる人物からの影響について分析する。黄遵憲が、父森春濤へあてた手紙の中には森槐南の『補春天伝奇』を絶賛しながらも、まだ戯曲を俗とみていた節がうかがえ、森槐南の友人橋本が『新文詩』に書き残した作品にも森槐南自身が戯曲に耽るしかない我が身を思う様子が描かれている。友人と填詞でやり取りした記録が見られるもの、少なくとも森槐南自身が戯曲を俗であることと認識はしていたようである。『補春天伝奇』の序文で友人は森槐南こそ中国を理解するうえで俗文学の重要性を知っていると遺していることから、少なくとも大事な認識であったことは間違いないだろう。それは彼の講義を記録した『作詩法講話』に、詩とともに戯曲についても記録されていることから明白である。

「詞雅曲俗」の価値観はありながらも、中国文人との交流や中国への理解を深めるために俗として切り捨てず芸術・学術的価値を見出したという点で、森槐南は近代戯曲研究における大きな転換点となったと言えるのではないか。

Ⅲ・6 井上紅梅『金瓶梅』——支那の社会状態』が意味するもの

楊 維公（京都大学大学院）

近代日本における中国古典文学の口語訳として、比較的早い時期にまとまった規模の作品として刊行されたものとしては、まず井上紅梅（一八八一？—一九四九？）『金瓶梅』——支那の社会状態』（上海：日本堂書店、一九二三年。以下「井上紅梅訳『金瓶梅』」と略す）を挙げねばならない。ところが、完訳ではないこと、訳者の井上紅梅が中国文学の専門家ではないこと、そして日本本土で発禁処分を受けて影響力が限られていたこと等の理由からか、この訳は長らく顧みられることはなかった。

近年、大正後期から行われた中国古典小説の日本語訳事業はようやく学界において再考の動きが見え始めた。本発表は、井上紅梅の経歴をめぐる先行研究の成果を踏まえ、井上紅梅訳『金瓶梅』の訳訳としての特徴を分析し、その当時における意味を考察しようとするものである。

井上紅梅訳『金瓶梅』の最も顕著な特徴はそれが完訳ではないことである。この点は従来この訳訳が有する最大の欠点とされてきた。確かに、恣意的な取捨選択はアカデミックな訳訳姿勢と乖離しており、原作を理解するにも支障や偏りが生じかねない。しかし、そもそも井上紅梅はどのような目的をもって『金瓶梅』を訳訳したのだろうか。省略の多さを問題にするとしても、いったいどの部分が省略され、どの部分が訳訳されたか、その取捨選択についてはほとんど分析されていない。この点を分析し、当時の日本における中国文学ならびに世界文学の訳訳事情と結びつけて考察することにより、井上紅梅が『金瓶梅』を訳訳した目的とその意義を理解することができよう。発表者は、本発表を通じて、日本において、研究者の手を離れた中国文学の訳訳がいかにして発生したのか、そしてそれは果たして成功したのかを、当時の中国学との関係を再考することにより明らかにしたい。

Ⅲ・7 大正期における和訳『桃花扇』について——山口剛と今東光の場合 李思漢（京都大学大学院）

大正期には、鹽谷温（一八七八〜一九六二）、山口剛（一八八四〜一九三三）、今東光（一八九八〜一九七七）三人の『桃花扇』和訳本が相次いで出版された。鹽谷温による漢文直訳体で訳された『国訳桃花扇』（一九二二）には、『桃花扇』の曲辞の華麗さが保たれているといえる。それに対し、山口剛と今東光は日本人にとって馴染み深い音律性に富んだ七五調で『桃花扇』の和訳を行った。

日本の浄瑠璃や歌舞伎の台本は七五調で創作されるものが多数で、山口剛と今東光がそれらを参考に日本の演劇的な手法で『桃花扇』を翻訳したことは明らかである。そのほか、山口剛は、鹽谷温の説を継承し中国演劇を「一種の歌劇」と紹介しており、さらに「脚色」を歌舞伎の役柄に例え説明している。これらの点から見ると、大正期の知識人が、中国の戯曲を閲読用の文学作品のみならず、上演用の台本でもあると認識していたことは明白である。

その一方で、大正期の中国への感覚は、明治の漢学素養から次第に異国情緒あふれる「支那」へと転化していき、大正文壇ではいわゆる支那趣味といった創作傾向も蔓延していた。その作品群のうち、秦淮遊廓を舞台とする幾つかの作品が屢々その代表作として取り上げられている。『桃花扇』は秦淮遊廓に取材する最も名高い明清伝奇であるため、山口剛や今東光の翻訳については、当時の支那趣味や文学作品の中で秦淮がどのように描写されたかといった点から検討する必要もあるであろう。

本発表では、山口剛と今東光の翻訳手法と表現を分析し、二人の『桃花扇』原作に対する解釈を考察しながら、日本における中国演劇の受容過程と支那趣味の創作文脈の両面において、両作の位置づけを試みたい。また、彼らの訳した『桃花扇』はそれぞれ『近代劇大系』と『支那文学大観』に所収されているが、その背景に存在する大正期の日本における『桃花扇』の原作に対する評価や、中国演劇に対する認識についても説明していく。

この発表は、一九三〇年代初頭の中国学研究に焦点をあて、当時、日中双方の研究者たちが、いかに協力しあい研究に取り組んでいたかを考察しようとするものである。

孫楷第（一八九八～一九八六）が編輯した『日本東京所見中国小説書目提要附大連図書館所見中国小説書目提要』（一九三二年）及び『中国通俗小説書目』（一九三三年）は、周知のとおり孫氏による丹念な実見調査に基づいた初の本格的な中国小説図書目録である。孫氏は、書目編纂のため柳条湖事件直前の一九三一年九月十七、十八日頃に来日し、東京での熟閲調査を開始したのだが、従来は、このことについての具体的な考察は殆どなかったように思われる。

満州事変勃発後、多くの中国人留学生在が帰国を余儀なくされた。稲畑耕一郎氏の「傳増湘と内藤湖南——新発見の書簡数通からの考察——」によれば、北平図書館の孫氏の同僚である謝国楨（一九〇一～一九八二）もこの時東京に来ていたが、事変の発生に伴い帰国したことが確認できる。しかし、孫氏はその後も一ヶ月程度日本に留まったとみられ、孫氏はこの点において、謝国楨をはじめとする多くの留学生とは異なる目的意識があったことが窺われる。

孫楷第は、その後も東京に約一ヶ月半滞在し、宮内省図書寮、内閣文庫、帝国図書館、東京帝国大学中哲文研究室、静嘉堂文庫、尊経閣文庫、成實堂文庫、村口書店等を精力的に訪問した。十一月初旬、東京を発ったが、当初予定した京都ではなく、急遽手配した満鉄大連図書館で五日間の調査を行い、十五日天津港へ帰着した。

孫氏の日本訪問に際しては、傳増湘、楊樹達、塩谷温、長沢規矩也、田中慶太郎らが支援した。更に、間接的な支援者として胡適、馬廉などの存在も見出すことができる。

これらの支援者との交流についての考察を通じて、当時の日本と中国双方の学界の実情に少しでも迫りたい。

### Ⅲ・9 近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について——岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献

松村 茂樹（大妻女子大学）

世界有数の美術館である米国のボストン美術館は、「東洋美術の殿堂」とも称せられる。その東洋美術コレクションが、一九〇四年から亡くなる一九一三年まで在籍（一九一〇年からは中国日本美術部長）した岡倉天心によって整備され、充実の度を加えたことは有名である。

ボストン美術館の東洋美術展示場には、中国最後の文人と称される呉昌碩が一九一二年に揮毫した「与古為徒」扁額が掲げられている。これは、従来、天心が呉昌碩に依頼したものと考えられて来たが、実は、天心の友人で、当時上海在住の漢学者・長尾雨山が、隣人関係にあった呉昌碩に揮毫を依頼し、黒漆木額に仕立ててボストンの天心宛に送ったものである。この頃、雨山は、天心より、ボストン美術館鑑査委員を委嘱されており、その就任記念に、この扁額を贈ったと発表者は考えている。

東京高等師範学校教授、東京帝国大学文科大学講師であった雨山は、いわゆる教科書疑獄事件に巻き込まれ（これが無実であったことは樽本照雄氏が証明されている）、一九〇三年、上海に渡り、商務印書館で編訳に携わりつつ、詩壇耆宿の劉炳照らと交わり、上海で詩会を創始している。そして、劉炳照を通して知り合った呉昌碩と深く交わり、中国の文人的教養を高いレベルで身に付けた。この雨山がボストン美術館に関わり、天心が部長を務める中国日本美術部のために大きな貢献を成したことは想像に難くない。

発表者は、二〇一五年四月より一年間、ボストン大学客員研究員としてボストンに滞在し、ボストン美術館で資料調査をする機会に恵まれた。その過程で、それを裏付け得る資料及び天心旧蔵の漢籍を発見することができた。今発表では、この資料調査に基づき、岡倉天心、及び呉昌碩と親しく交わった長尾雨山が、その高い中国学の素養を以て、ボストン美術館に貢献するという、日中米文化交流の実態を明らかにしたい。

### Ⅲ・10 中国近代の美術理論における日本の影響——李叔同「図画修得法」と柿山蕃雄・松山茂『図画教授法』の比較を通じて

楊 冰（日本学術振興会特別研究員）

中国の近代の諸芸術理論の誕生において、李叔同（一八八〇～一九四二）は大きな功績を残した人物である。一九〇五年に李叔同は東京美術学校に入学し、油絵を専攻しながら初めて演劇グループを立ち上げ、活動を行い、音楽雑誌も作っていた。つまり、彼が芸術に対して専門的な知識を学び、積極的に実践をしていたのは、日本留学中においてである。今までの先行研究においては李叔同の諸芸術に対する思想と日本との関連性を見逃している。発表者の研究はその空白を埋めるものである。

本論文は、李叔同の美術理論に注目したい。具体的に、彼が日本にやってきて数ヶ月後に発表した「図画修得法」（雑誌『醒獅』一九〇五年十二月）を取り上げる。「図画修得法」は、中国近代の美術教育理論の先駆と、先行研究において位置付けられていたが、さきほど触れたように日本による影響が先行研究の視野から外されていた。

「図画修得法」の最初では、李は「柿山、松田両先生の言に自らの意を加えて書いた」と説明をしている。つまり、この文章は自らの独自の理論ではなく、柿山と松田という二人の日本人の理論に基づいて展開したものだ、李が明言している。発表者の調べによれば、李の「図画修得法」は、一九〇三年に出版された柿山蕃雄と松田茂著の『図画教授法』に基づいて書かれたものである。本論文は、図画の「定義」、「効力」、及び図画の創作において最も重要視されている「精神法」という三つの重点に絞って、「図画修得法」における『図画教授法』の影響を明らかにする。それによって、近代の中国の美術理論の先駆である「図画修得法」は中国伝統的な絵画創作論（気韻生動論）の延長線に基づくものか、それとも西洋の絵画創作論の中国における導入なのかを明らかにし、中国の近代に誕生した美術教育理論の実質を探る。

「孝」の物語と中国近世・日本近世の事例

青木 洋司（國學院大學）

許 家晟（学習院大学国際研究教育機構PD共同研究員）

原 信太郎 アレクサンドレ（早稲田大学非常勤講師）

○松野 敏之（国士舘大学）

儒教の重要な特徴の一つに「孝」の重視が挙げられる。「忠」（君臣関係）と共に、具体的な人間関係の実践道徳として「孝」（父子関係）は重視されてきたものである。しかし、親を大切にすることは世界的に見られる考え方であり、ただ漫然と親子関係の大切さや「孝」の重要性を論じるだけでは儒教の特徴とは言い難い。「孝」が儒教の特徴と言えるのは、多くの研究でも指摘されている通り、「孝」が人の存立根拠に関わるという強い自覚を抱きながら、理論的にも「孝」を重視してきたためである。またそれと同時に、倫理規範の根幹である「孝」をいかに実感するか、ということも考えられてきたであろう。これには聖人や孝子の物語による読者の心の涵養という側面もある。たとえば、朱熹は童子や初学者が孝などの道徳を養うことを企図して『小学』を編纂し、古代から宋代までの孝子の話を稽古篇・嘉言篇・善行篇に収めた。しかし『小学』に収録された話は、当然ながら選別されたものでもある。継母の要望に従い、真冬に氷の張った水の中より鯉を得た王祥の話は『小学』に採録されているが、家貧しく母

を養うためにやむを得ずに我が子を生き埋めにしようとし、その穴を掘っていたところ黄金を手に入れたという郭巨の話は収められていない。この二つの話はともに『蒙求』に見えるものであるが、『小学』には郭巨のような話は収録しなかったのである。やはり時代や地域、個人の嗜好によっても好まれる孝子の話に違いはあるであろう。あるいは、舜のように経書の中で語られる孝子の話柄もあるが、それらも経書の注釈者が考える「孝」によって解釈に差異は生じてくるものであろう。

今回は、「孝」を実感させる物語としてどのようなものが生まれ、またどのような変遷が見られるのか、さらには「孝」の捉え方と経書解釈の関連など、「孝の物語」に関して検討を試みたい。人々が「孝」を実感してきた物語やその変遷について考察することは、今後、儒教の特徴を発信していく上でも重要なことであると想定している。ただし、パネラー達の力量では全面的な考察をすることは適わず、中国近世および日本近世における個別事例を挙げながら、「孝の物語」に関する特徴などを論じてみたいと考えている。



中国古典詩における クロス・リーディング 精読の探求

○浅見 洋二 (大阪大学)

遠藤 星希 (青山学院大学)

甲斐 雄一 (日本学術振興会特別研究員)

狩野 雄 (相模女子大学)

「精読 (Close Reading)」は、文学研究の歴史において特別な意味合いを負わされたこともあるが (作品を作者や時代背景から切り離して分析する研究方法であるとされるなど)、ここではごく一般的な意味合いで用いる。すなわち文学作品のテクストを丁寧に、精密に読み解くこと。これが文学研究にたずさわる者の常に立ち返ってゆくべき根本であるのは疑いない。精読の探求を目標として掲げるゆえんである。

対象として取りあげるのは、六朝・唐・宋の詩。狩野が陸機「贈潘尼詩」、遠藤が李賀「金銅仙人辞漢歌」、甲斐が陸游「庵中晨起書触目」について、それぞれの関心のもと精読を試み、それらを結びつけるかたちで浅見が中国古典詩の読みをめぐる問題点を抽出し、全体の討議につなげる。

パスカル『パンセ』に「速く読みすぎても、ゆっくり読みすぎても、何もわからない」という。「遠すぎても近すぎても……」

あるいは「浅すぎても深すぎても……」と言い換えてもいい。これは常識的には、両極端を排し中庸を得た適正な読解をこそめざすべきだと説いた言葉として受けとめられよう。われわれの精読もまた、正しい距離と速度と深度を保ちつつ、テキストを正しく理解することをめざすべきなのだろうか。

ここではむしろ次のように問うてみるはどうか。そもそもテキストの読解において「正しさ」とは、何かが「わかる」とはどのようなことをいうのか、と。われわれは「正しさ」を見失うことを恐れずに、テキストに近づいて、深く、ゆっくりと読んでみると思う。結果として何もわからなくなるかもしれない。だが、ときには「わからなさ」のなか途方にくれることも必要かもしれないではないか。

多くの方々が積極的に討議に参加されることを願う。

詩人の伝記と批評はどのように形づくられるか——『列朝詩集小伝』を例に

○野村 鮎子(奈良女子大学)

田口 一郎(東京大学)

和泉 ひとみ(関西大学非常勤講師)

松村 昂(京都府立大学名誉教授)

『列朝詩集』八十一巻は、錢謙益が明滅亡後に明一代の詩を後世に遺すことを目的として編纂した明詩の選集である。上は皇帝から下は僧侶や宦官まで、一、八三二名の詩人の小伝とその詩篇を収録する。小伝は膨大な数の明代文人の伝記とその評価をコンパクトに整理していることから世に重宝され、康熙年間には小伝のみを輯めた『列朝詩集小伝』(以下『小伝』)が刻行された。

『小伝』は、明代文学研究において第一級の基本資料とされてきた。とりわけその反古文辞の思想は『明史』文苑伝や『四庫全書総目提要』などに引き継がれ、現在の明代文学史観の出発点ともなっている。ただし、「文献徴すべきもの無き」時代とは異なり、明代の文献は目撃可能なものが多く、錢謙益が依拠した資料を索出し、原資料と『小伝』とを比較対照することも可能である。つまり、『小伝』がどのように詩人の伝記と評価を形づくっていったか、その過程をある程度跡づけることができるのである。

本研究グループは、ここ数年、『小伝』と錢謙益の文学思想について研究を進めてきた。このパネルでは、『小伝』を例に、中国の詩人の伝記や評価がいかに形づくられていったかについて検討したい。

○野村鮎子『小伝』の依拠資料からみた『列朝詩集』の性格

『小伝』を編纂する際に錢謙益が依拠したとおぼしき原資料は、詩人の墓誌銘や行状はもとより、詩集の序文や詩話から筆記小説や野史の類にまで及んでいる。そのほとんどは、錢謙益自身が呉の地で蒐集した文献である。こうした依拠資料をもとに詩人の伝記と評価がどのように形づくられていったのかを考えたい。

○田口一郎「謝榛小伝」からみる『列朝詩集』の性格

丁集巻五に伝が採られる謝榛は、文学史的には「後七子」の一人とされるが、実際には李攀龍等により「七子」に加えられたり削られたりした特異な存在である。ここではその「小伝」を仔細に分析することにより、『列朝詩集』の性格や錢謙益の文学流派概念などについて考察したい。

○和泉ひとみ『小伝』における李東陽及び湯頭祖の評価について

『小伝』は前後七子批判の一方、李東陽を再発見する外、湯頭祖も高く評価している。彼らの詩の作風が錢謙益らの文学論に合致した結果だが、『小伝』は既定の枠組みに嵌めようとする余り、彼らの作品の持つ一部の特徴或いは実態を等閑視している。今回はこうした現象を取り上げ、『小伝』の持つ恣意性について考えたい。

○松村昂『小伝』における李卓吾の位置づけについて

李卓吾は『小伝』では閨集、つまり一般の詩人とは別の、仏僧・道士とあわせて「異人」として収録されている。彼の友人焦竑や門人の袁宏道・袁中道が正當に配置されておりながらである。錢謙益の一世代後の黄宗羲が『明儒學案』で排除し、顧炎武が『日知録』で激しく非難していることと考えあわせて、錢謙益の李卓吾に対する微妙な対し方を考えてみたい。

〈特別講演会〉寧楽（なら）と中国——古代文字資料の世界

後援…奈良女子大学古代学術研究センター  
連携…「東アジア文化都市二〇一六奈良市」実行委員会

奈良はシルクロードの終着点ともよばれ、古来、大陸文化の影響を色濃くうけてきました。本学の古代学術研究センターでは、東アジアという広い視野に立ち、学際的に古代日本の様相を明らかにする研究を進めています。今回は、古代文字資料——木簡・正倉院文書——に焦点をあて、大陸から奈良への文化の伝播と受容のさまについて、研究成果の一端をご紹介します。

「木簡から見た日本古代の文字文化」 奈良女子大学古代学術研究センター 特任教授・木簡学会会長 舘野 和己

日本古代の文字文化の実態を示すものとして、正倉院文書や木簡があることはよく知られている。木簡は既に四〇万点以上出土し、豊かな文字文化の世界を我々に提供してくれているとともに、国家の編纂した歴史書の語らない多くの事実を語り、我々が新たな歴史像を作る大きな手がかりになっている。とりわけ奈良県は、飛鳥・藤原京・平城京と連続して都が置かれた所であり、古代木簡の大半はそこから出土しているのである。

日本木簡使用の時期は今のところ、七世紀前半までしか遡らず、七世紀後半になって盛んに用いられるようになり、八世紀のものが最も多く出土している。したがって中国の木簡文化が直接我が国に伝わったというよりも、朝鮮半島を経由してもたらされたものと考えられる。

そこで韓国木簡とも比較しつつ、日本古代木簡の特徴を見ていきたい。両国にのみ共通する意味で用いられた漢字などからは、韓国の文字文化との共通点が浮かび上がる。そして習書木簡などからは、古代日本人がいかにして漢字を習得したかをうかがえるし、文書木簡に見える文章表記や、税物に付けた荷札木簡などに見える物品名や地名表記からは、漢字のみでどのように日本語を表記しようとしたのか、古代人の工夫の程を知ることができる。さらに木簡の様々な使い方を通して、木簡世界の広さ・豊かさを紹介したい。

正倉院事務所が管理する古代の文物の中に、文字が書かれていることを主たる属性とする正倉院文書・聖語藏経巻という資料群がある。これまで日本古代史を中心に、国語学、国文学、仏教史、美術史ほかの諸分野から、貴重な研究対象として多面的なアプローチがあり、生み出された成果も多い。仕事柄、私はこの資料群と長くつきあってきたが、ようやく気付いたのは、「われわれが資料を研究する」という主語・動詞に支えられた構文は、当時の人々にとっては、全く与り知らぬところだ、ということである。彼らは「文字を書くこと」を通じて「しごと」をした。今、資料と称するものは、総体として「しごと」の過程での生成物なのである。そのなかには見事に書写された典籍・仏典のような成果品がある。同時に、書写とその周辺の諸作業をいかに効率よく、正確に行うか、工夫が詰まった「しごと」の産業廃棄物もたくさんある。

この講演を機に、（持論ではなく）正倉院の資料を、より広い範囲に紹介したい。演題の「漢字リテラシー」は、個別の資料にいちいち当てるモノサシではなく、「しごと」の現場で「何が起こっていたかを忘れないための「おまじない」である。

諸分野からのアプローチが、それぞれ独自の学的文脈を伴うことを前提に、多角的な視点・方法が面として交わり、新たな成果を生み出す。そのための環境整備につながるお話ができればと思っている。

〈特別展示〉正倉院模造宝物展 附奈良女子高等師範学校拓本教材展

後援…奈良女子大学古代学術研究センター

奈良の正倉院には、シルクロードを経て伝来した美術工芸などの宝物が約九千点蔵されており、毎年秋に奈良国立博物館で開催される正倉院展では、そのうちのいくつかが展示され、全国から多くの観覧者が訪れます。ただし、年ごとに出品される工芸品の数には限りがあり、いつでも気軽に鑑賞できるというものではありません。

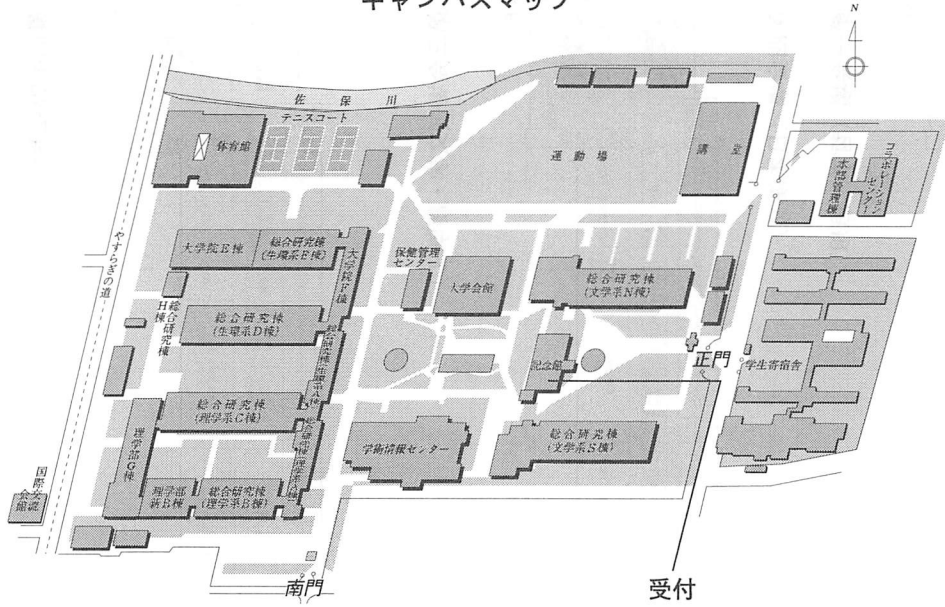
一方、正倉院宝物に用いられている技法は多くの工芸家にとっても関心の的であり、江戸時代から模造品が制作されてきました。そして、明治になると本格的な復元模造が行われるようになりました。現在、模造宝物の所蔵先としては、正倉院事務所・東京国立博物館・奈良国立博物館などがよく知られています。実は奈良女子大学にも模造宝物および関連資料五十一点が伝わっています。そのほとんどは、漆工芸の第一人者である吉田包春の手になるものです。これらは本学の前進である奈良女子高等師範学校が戦前から研究教材として蒐集したものであり、模造品とはいえ、本物と寸分違わぬ精巧なものです。

また、本学には奈良の古寺を中心とする金石拓本も多く伝わっています。いずれも戦前、授業で使用していた教材ですが、今となっては入手が難しい拓本です。戦後、長い年月の間に劣化が進んだことから、目下、順次修復を行っており、主なものについてはほぼ修復を終えています。

このたび、奈良女子大学古代学術研究センターの協力を得て、この貴重な正倉院模造品の一部と修復を終えた拓本を特別展示する運びとなりました。この機会に、ぜひご観覧ください。

吉田包春：一八七八～一九四九。春日大社大塗師職であった吉田陽哉の三男として、兄の吉田立斎、北村久斎とともに、正倉院御物の修復に関わった。

# キャンパスマップ





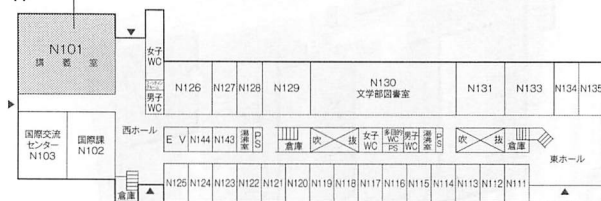
# 大会会場案内図（文学系N棟）

（略号：N）



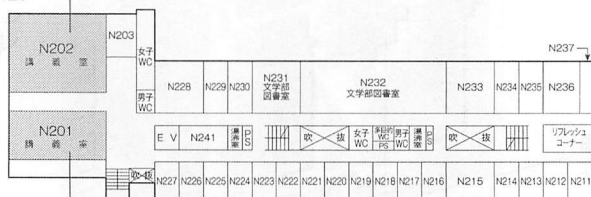
## 書店出版社展示

1F



## 第三会場（文学・語学 2）

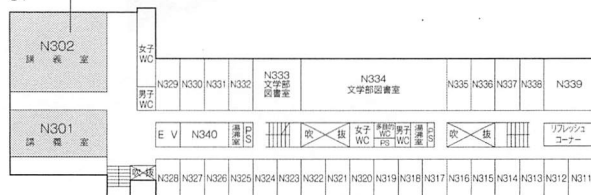
2F



## 第四会場（日本漢文）

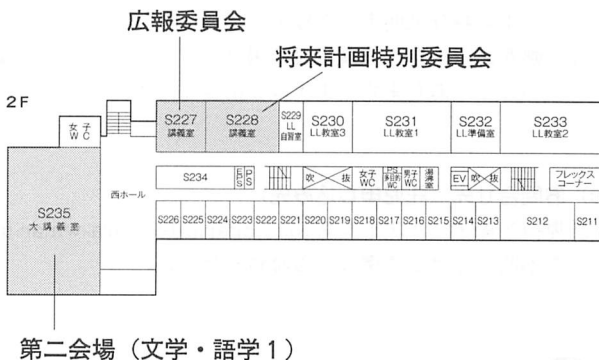
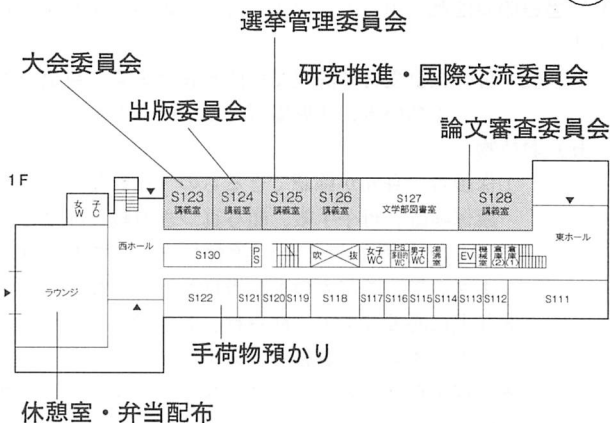
## 第一会場（哲学・思想）

3F



# 大会会場案内図（文学系 S 棟）

〈略号：S〉



## 8) 予約の変更

担当者まで速やかにご連絡ください。当日の急な発病によるキャンセル、時間変更など、できる限り対応します。

## 9) 当日の諸注意（申込者にはより詳しい説明書をお送りします）

a) 受付：大会受付に託児受付所を設けます。料金のお支払い後、託児場所にご案内します。

b) お持物：

①保護者の身元が確認できるもの（運転免許証、健康保険証、母子手帳、顔写真付きの職員証など）

②「こども紹介カード」（添付ファイルでお送りしますので、ご記入の上、当日お持ちください。）

③託児に必要なもの（飲み物、お弁当、おやつ、ミルク、オムツ、着替え、タオルなど）

\*昼寝用布団、おもちゃは「ならっこルーム」で準備します。

c) お迎え：原則としてお預けと同じ方をお願いします。

①の身分証明書をご提示ください。

d) 熱がある場合、体調不良の場合などはお預かりできないことがあります。まずはご相談ください。

## 10) お問い合わせ先（託児申し込み先）

託児担当係メールアドレス: [qas\\_agario@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:qas_agario@cc.nara-wu.ac.jp)

\* ご不明の点はご遠慮なくお尋ねください。



協力：奈良女子大学ダイバーシティ研究環境支援本部

## 託児室のご案内

### 1) 託児室について

「奈良女子大学 子育て支援システム イベント託児システム」を利用します。学会等の一時預かりに慣れたサポーターが、お子さまをお預かりします。

### 2) ご利用資格

本大会に参加される会員で、満3か月から小学6年生までのお子さま（中学生は要相談）をお持ちの方。

### 3) 託児時間

8日（土） 9：00～18：00

9日（日） 9：00～16：00

### 4) 開設場所

奈良女子大学託児施設「ならっこルーム」  
（当日、受付時にご案内します。）

### 5) 料金

半日（午前のみ、または午後のみ）：1,500円

全日：3,000円

\* 当日、受付にてお支払いください。

### 6) 保険

万が一の事故に備えて、奈良女子大学で保険に加入しています。補償については、保険会社の規定の範囲内となります。なお、日本中国学会及び奈良女子大学は事故等に対する責任を負いかねます。

### 7) 申し込み方法

振込用紙でのお申し込みは受け付けておりません。

メールに、①託児希望日時、②託児希望人数（年齢）、③申込者氏名、④連絡先を記載し、下記担当者までお申し込みください。折り返し、必要書類等を添付ファイルにてお送りします。

申し込み期限は、9月28日（水）です。



### 〈大会会場〉奈良女子大学

近鉄奈良駅①番出口から北へ徒歩5分→正門

JR奈良駅「奈良交通」バス(5分)近鉄奈良駅下車、同上

#### ①京都から

近鉄京都線で近鉄奈良駅まで特急約35分、急行45分+徒歩約5分

#### ②大阪(梅田)から

JR大阪環状線(外回り)で鶴橋へ、近鉄奈良線(快急・急行)で近鉄奈良まで約50分+徒歩約5分

#### ③難波から

近鉄奈良線(快急・急行)で近鉄奈良まで約35分+徒歩約5分

#### ④関西国際空港から

a. 空港バスで近鉄奈良駅まで約80分+徒歩約5分

b. 南海空港急行で難波へ、近鉄奈良線(快急・急行)で近鉄奈良まで約110分+徒歩約5分

c. JR関空快速で天王寺へ、JR大阪環状線(内回り)で鶴橋へ、近鉄奈良線(快急・急行)で近鉄奈良まで約100分+徒歩約5分

#### ⑤大阪(伊丹)空港から

a. 空港バスで近鉄奈良駅まで約60分+徒歩約5分

b. 空港バスで難波へ、近鉄奈良線(快急・急行)で近鉄奈良まで約70分+徒歩約5分

### 〈懇親会会場〉レストラン〈葉風泰夢(ハーフタイム)〉

(奈良国立博物館地下1階)

〒630-8213 奈良市登大路町50番地 TEL 0742-22-1673

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

奈良女子大学文学部 日本アジア言語文化学コース内

## 日本中国学会第68回大会準備会

TEL/FAX 0742(20)3279

E-mail zhongwen@cc.nara-wu.ac.jp